

■目的

たたら生産システムの保全と継承



■菅谷たたら山内フィールドミュージアム構想にあたって

近代たたら製鉄は、日本の近代化と産業発展の基礎となった鉄生産に多大な影響を与えた。その生産工程を知ることができるのは、全国で菅谷たたらしか残されていない。

文化財に指定されているこれらたたら製鉄に関わる歴史資源を保全し後世に継承することを目的とする。

■「菅谷たたら山内フィールドミュージアム」の独自性

大正10年まで操業が続けられた菅谷たたら山内は、多くの自然が今に残る場所に現存することが大きな意味を持っている。つまり、たたら操業には、「砂鉄を多く含む土質の特性」、「豊富な森林資源」、「巧みな水の利用」等生産のための自然環境が必要不可欠であり、またその背景には信仰心に支えられた日本独自の自然観が存在する。それらの要素を空間として体験できる点が他の産業遺産にはない「菅谷たたら山内の独自性」といえる。

■「菅谷たたら山内フィールドミュージアム」のねらい

山内でのたたら生産施設（生産的環境）、往時の生産者の生活環境（社会的環境）豊かで美しい自然景観（自然的環境）、これらの要素を体感してもらう。それが「菅谷たたら山内フィールドミュージアム」のねらいである。

■「菅谷たたら山内フィールドミュージアム」のエリア

- 山内を【ゾーン1】「たたら郷ミュージアムゾーン」
  - 吉田町町部を【ゾーン2】「田部家と歩んだたたら製鉄が息づくまちゾーン」
  - 事業団周辺を【ゾーン3】「近代たたら操業体験ゾーン」
- に分け、全体を通じてたたら製鉄の歴史を体感できるミュージアムを目指す。

菅谷たたら山内の構成要素

構成要素① 【 生産的環境 】

- ・たたら生産に関わる建物（高殿、元小屋）
- ・炉、水車、送風装置
- ・砂鉄、精錬施設（鉄穴流し跡等）

構成要素② 【 社会的環境 】

- ・山内労働者住宅（三軒長屋、集落内の住宅）
- ・信仰（桂の木、金屋子の神）
- ・吉田の町並（田部家）
- ・山内の生活を支えた農地
- ・生産物の消費地との繋がり（流通）

構成要素③ 【 自然的環境 】

- ・山内の後背地の森林（循環的利用）
- ・水利、地形、風

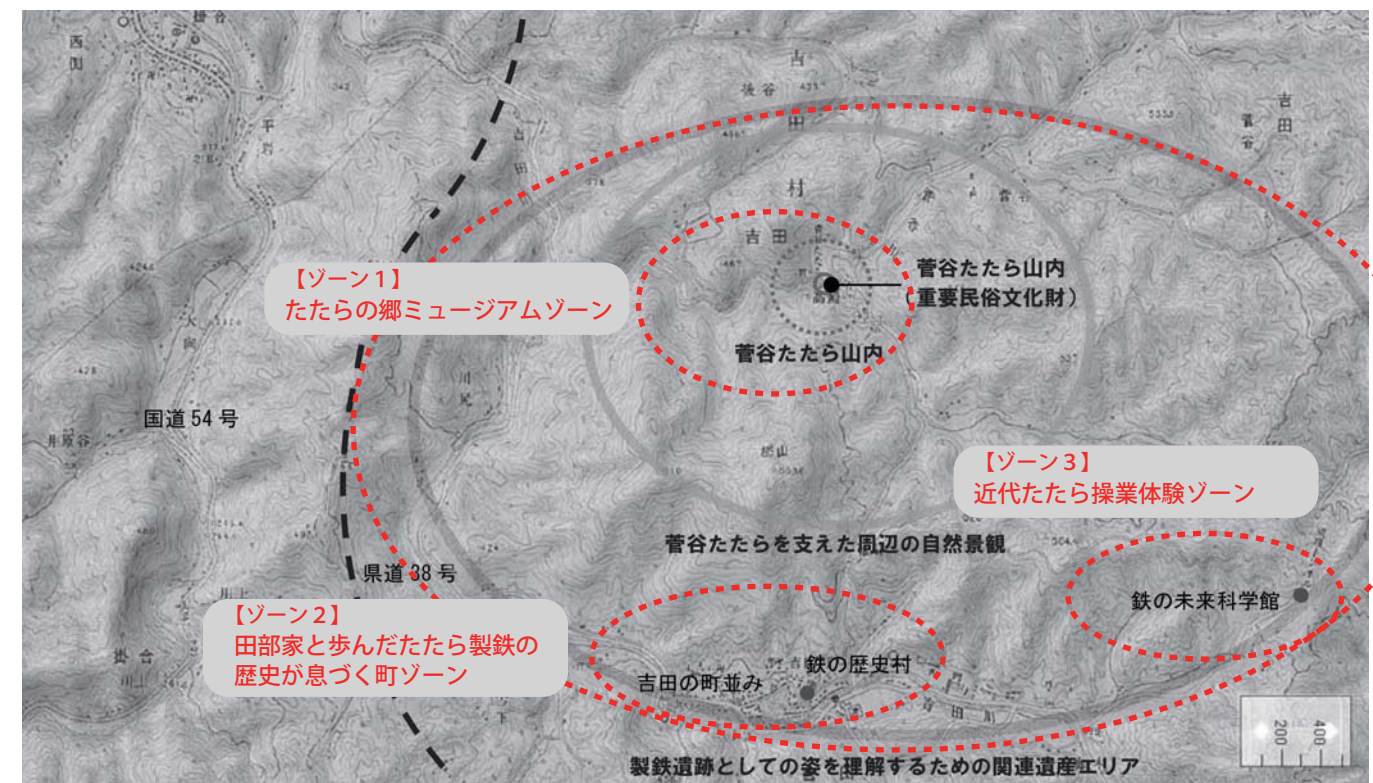
必要となる検討

【保全】

- ・維持修理、復元
- ・調査、研究（顕在化）
- ・保存管理計画作成及び管理体制の構築など

【継承】

- ・ガイダンス施設、サイン説明板の整備
- ・運営体制の見直し（関連施設との役割の見直し）
- ・持続的運営手法の検討など



菅谷たたら山内フィールドミュージアム エリア計画

## 菅谷たたら山内活用ビジョン検討資料

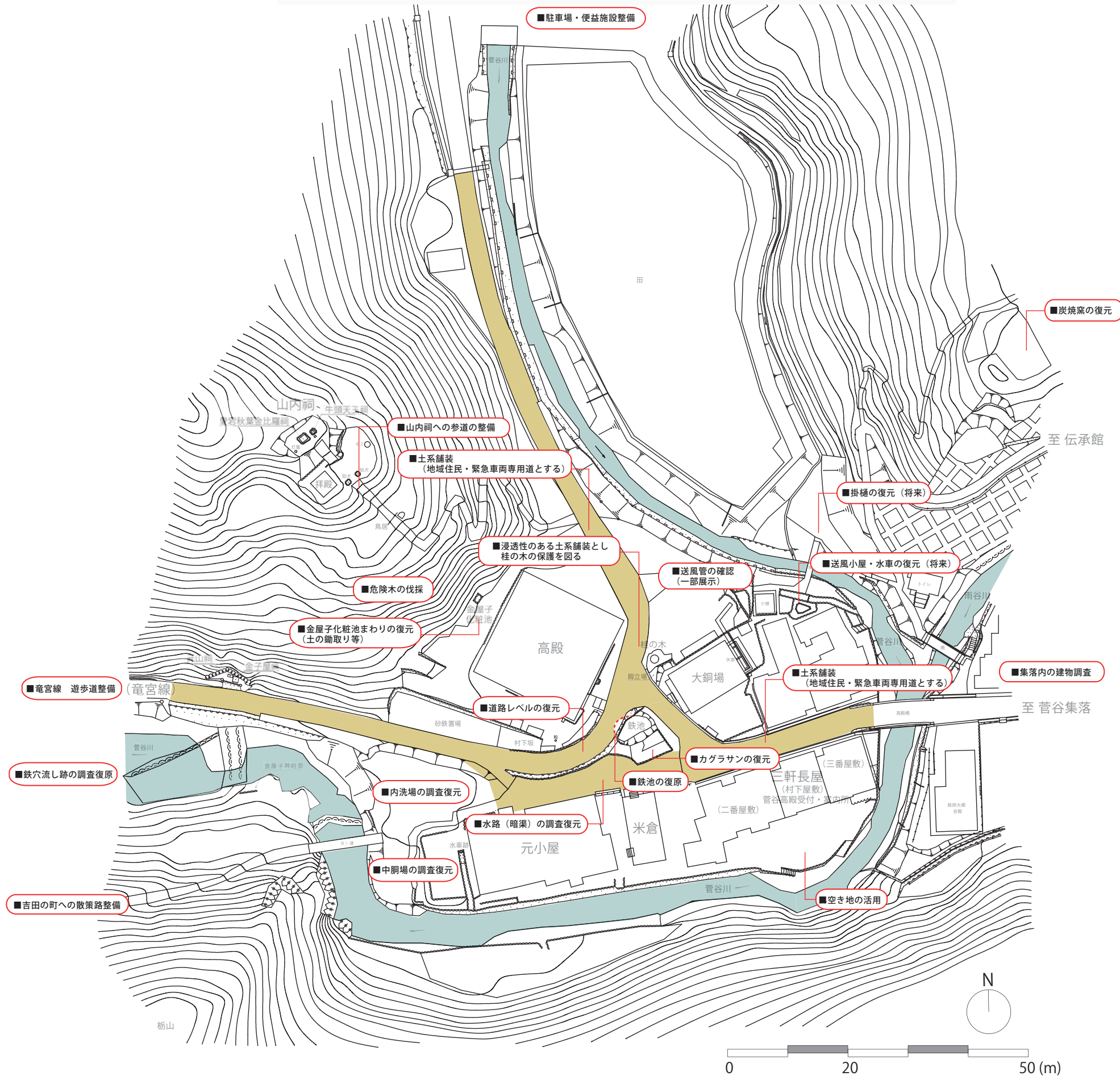
構成要素	キーワード	対象	ビジョン	ビジョン実現に当たっての課題	検討事項	協力組織体制
生産的要素	見る・学ぶ	高 殿	高殿は、菅谷たたら山内の中核施設であり、近代たたら製鉄の歴史を伝えるシンボルでもある。また、近代の砂鉄精錬を行った製鉄炉をもつ建物は世界唯一の施設ともいえる。高殿が今日まで見学者に魅力を与えてきたのは、その歴史性に高殿が醸し出す神秘性や神社仏閣のにも似た壮麗さが備わっているからであり、その趣を活かして公開を行う。	①耐震補強工事を含む保存修理を終えた高殿にかつての神秘的な面影がどの程度残されるか。 ②高殿内の各種の機能をもった施設(火打、送風管、村下座、番子部屋等)の復元と活用。	①照明の工夫 ②火打(屋根の開閉)、送風管分岐部をどう復元し、公開するか。 ③展示物の有無 ④高殿後ろの「金屋子化粧の池」の復原。	鉄の歴史村
		鉄 池 (市道竜宮線)	鉄池は、製鉄炉からコロで運び出された高温の鉄塊を池に沈めて冷却する施設であり、たたら師にとっては緊張の続いた、たたら操業から解放される場でもある。操業当時、鉄池にはカグラサン(鋳塊を引き出す際にロープを巻き取る装置)が設置されていた。現在、鉄池は単に窪み状を呈しているのみであるが、本来の鉄池を復原し、高殿と連動したたたら製鉄の主要施設として位置づけ、操業当時の鉄池の姿を復活させる。(鉄池はたたら関連施設の中心部に位置し、桂の木と並ぶ山内全体のシンボルとなる。)	①鉄池の一部は消滅し、市道が敷設されている。 ②カグラサンが復元されれば、菅谷たたら山内のシンボルになるといえるが、どのように設置されていたか資料に乏しい。 ③生活道路としての市道のあり方	①鉄池をどう復元するか。 ②カグラサンの復元、設置は可能か。 ③市道を迂回させる等の対策の可能性の有無。	吉田総合センター 菅谷自治会
		元小屋	元小屋は、たたら操業だけでなく、山内の人々の生活全体を差配する責任者の事務所と包丁鉄(製品化された鉄素材)の仕上げ作業場が併設された柿葺きの建物である。間取りや台所などは、江戸時代の様相を今に伝え、土間に足を踏み入れると時代をタイムスリップする思いに駆られる。座敷や台所、二階など建物内部まで見学することにより、さらに異空間を体感できる場とする。	①中銅場があったとみられている作業場や内洗い場の復元方針。 ②二階の間など座敷を活用したイベントの可否。	①作業場の空間をどう活用するか。 ②座敷を活用したイベントの検討	鉄の歴史村
		鉄穴流し跡 (萱野鉄穴場跡)	明治期に作成された菅谷たたら山内絵図に鉄穴流し場が描かれており、この遺跡が今も現存している。菅谷たたらは炭焼き施設を除くほぼ全てのたたら関連施設が現存する世界でも例の少ない稀有な生産史跡であり、菅谷たたら山内の最大の特徴となっている。たたら関連施設がまとまって所在する山内と鉄穴場を周遊するコースを整備することにより、フィールドミュージアムとしての機能を最大限に引き出すことができる。	①文化財調査が未実施。 ②当該地が私有地であり、調査、活用にあたって所有者の了解を得る必要がある。 ③遺跡地の軟弱な土壌の保護対策を含めた遺跡全体の保護保存。	①補助事業(文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業)導入の検討	教育委員会政策推進課 土地所有者 清流クラブ

構成要素	キーワード	対象	ビジョン	ビジョン実現に当たっての課題	検討事項	協力組織体制
社会的要素	山内の信仰、生活にふれる	三軒長屋	三軒長屋は、南の建物から順に二番屋敷、村下屋敷、三番屋敷とよばれている。特に村下屋敷はたたら操業の責任者の住まいとして知られ、現在は山内の案内事務所として使われている。建築は最終操業時以前に遡ることから平成25年、文化財として追加指定された。今後、村下屋敷、三番屋敷は古い間取りと展示を活かした資料室とし、二番屋敷を、イベント開催機能とガイダンスを備えた案内事務所として活用し、見学者の利便を図る施設とする。また、長屋とその裏を流れる菅谷川の間には空きスペースがあり、自然が満喫できる憩いの場としても活用が可能である。	①二番屋敷に増築された近代の建物の撤去、及び長屋裏の広場の整備。 ②二番屋敷の活用策。	①二番屋敷の活用策。 ②村下屋敷、三番屋敷の活用によって何を重視すべきか。(住居・展示場)	鉄の歴史村 まちづくり組織
		祭祀施設	山内において、たたら製鉄に従事した人々、特に支配人や村下などは、鋸や銚の出来不出来が山内経営の安定に大きく関わることから金屋子神を厚く信仰し、操業の量産と安全を願った。また、住民の心の拠りどころとして信仰した祠も現存している。実際に祠の前に立つことによって往時の山内の人々の信仰をしのぶことが出来るよう、施設や参道の整備を行う。	①山内祠参道の整備。 ②危険木の撤去。	①高殿後背林の樹木管理。	菅谷自治会
		山内集落	菅谷たたら山内は、たたら製鉄関連施設だけでなく、製鉄に従事した人々が暮らした集落も含めて構成され「山内」とよばれている。山内の集落面積は、決して広くはなく、肩を寄せ合うように建てられた家屋は往時の集落の様子をしのばせている。この集落の景観(農地、墓地等も含む)は、菅谷たたら山内にとっても欠かすことのできない要素であり、景観の保全に努める。	①悉皆調査による残存する建物の把握。 ②家屋の建て替え、改修等、景観に影響を及ぼす場合の対応。 ③集落住民に対する景観保全のコンセンサス。	①見学者の動向や文化財としての菅谷たたら山内の保護保存方針を見据えた住民への説明。 ②保存活用計画による、集落保全のルールづくり。	吉田総合センター 菅谷自治会
		山内生活伝承館	山内生活伝承館の資料からは、かつての山内の人々の暮らしぶりがひしひしと伝わってくる。かつての山内の暮らしを知ることで出来る貴重な資料館として、さらに充実化を図る。	①無人化となっている伝承館での展示について。 ②来訪者が必ず伝承館を見学してもらえる工夫。	①炭窯の復元の可能性。 ②たたら製鉄に欠かせない炭焼きを中心とした資料展示。 ③長屋の活用、役割との調整。	吉田総合センター 鉄の歴史村
		桂の木	高殿の前にそびえる桂の木は、樹齢が100年をはるかに超える大木で山内を構成する重要有形民俗文化財のひとつとなっている。菅谷たたら山内が高く評価される理由のひとつが四季ごとに変化する桂の木の姿であり、画像の被写体としてカメラに収めるリピーターも多い。この桂の木は活用以前に保護対策を採ることが必要であり。地表に露出した根を保護する対策を取る必要がある。	①駐車場に表出した根の保護対策。 ②高殿横駐車場の制限	①浸透性のある土系舗装の採用	鉄の歴史村 吉田総合センター

構成要素	キーワード	対象	ビジョン	ビジョン実現に当たっての課題	検討事項	協力組織体制
自然的要素	歩く	菅谷川の渓流 谷間の地形 水利・風	竜宮線は、菅谷と吉田、掛合を結ぶ菅谷住民の生活道路となっている。一方、竜宮線と並行して流れる菅谷川は、四季ごとに景観が変わる美しい渓流となっている。この渓流は、山内の景観ともマッチしており、途中には、かつての鉄穴場跡や鉄穴流しで砂鉄を採取した洗鉱場も所在している。竜宮線を遊歩道として活用することで、渓流の景観を満喫することができ、たたら生産の仕組みや自然との関わりをより深く理解してもらおう。	①竜宮線は、生活道路でもあり、車の通行を止めると住民の生活に大きな影響を与える。 ②竜宮線散策者の車の駐車場確保。 ③ボランティアを募った渓流の保全活動。	①車の通行時間帯を制限できるか。 ②駐車場の確保は可能か。 ③見学者と車の両方を安全に通行させることは可能か。	吉田総合センター 清流クラブ 菅谷自治会
伝承・活用的要素	つなぐ	山内以外の吉田町たたら関連施設	吉田町に所在するたたら製鉄関連施設は、一ヶ所集中ではないことが大きなネックとなっている。菅谷、吉田町町部、郊外にある施設をそれぞれ完結作品小説のように独立したものとするのではなく、一編、二編と続編小説のように捉えることで施設同士の動線が生まれる。この動線を結ぶためのゾーンを設定し、ゾーンごとに活用計画を策定する。	①動線を結ぶためのゾーンのキーワード(例) (1)菅谷たたら山内—たたらの郷フィールドミュージアムゾーン (2)吉田町町部—田部家と歩んだたたら製鉄の歴史が息づくまちゾーン (3)事業団周辺—近代たたら操業体験ゾーン	①どの施設にどんな資料・展示物があるか調査、整理。 ②三つのゾーンの独自化の検討。 ③それぞれのゾーンを結ぶ散策ルートの設定。	吉田総合センター 鉄の歴史村 田部家
		鉄の道文化圏推進協議会(島根県安来市・雲南市・奥出雲町) 【たたら製鉄の調査研究と情報発信】	中国山地一帯で発展した「たたら製鉄」の歴史を伝えるべく、関連の歴史遺産を抱えるそれぞれの市町が独自のたたら製鉄を活かした事業を展開している。雲南市は、たたら製鉄のシンボルともいえる全国で唯一現存する山内を有している。加えて斐伊川中流域に発展した古代の製鉄に関する遺跡や資料もあり、この中流域は砂鉄を使った製鉄の発祥の地であるとも言える。これらの情報を発信することにより、雲南市が鉄の歴史と深いかわりがあることを知ってもらうとともに、広域的な鉄文化の活かし方を考える。	①いわゆる「鉄」は、あまりにも人々の身近にありすぎることから、鉄そのものについては一般的に関心が薄いと考えられる。「鉄」が人間の歴史に与えた影響は計り知れないこと、そもそも「鉄」とは?といった観点から「鉄の文化」というキーワードを全国に浸透させ(「鉄」に関心を持ってもらう)、その延長線上に「たたら製鉄」があることを理解する。 ②近代日本における産業発展の基礎となったたたら生産の鉄がどのように流通し、消費されていったか、文献等から調査研究を行う。 ③雲南市が所有する製鉄関連の考古資料の活用。	①「鉄」そのものを知るコーナーを設け、「鉄」に親しみ、関心を持ってもらうことの是非の検討。「鉄」をイメージ化することにより、「昔の人々はこうして鉄を作った」というスキルの展開が可能。 ②ホームページの活用。 ③アニメや本といった他の情報媒体とのつながりを積極的にアピールする手段の検討。	政策推進課 商工観光課 鉄の道文化圏市町鉄の歴史村
		菅谷たたらを核とするまちづくり団体との連携	多くの人々が雲南市を訪れて、たたらを中心とした斐伊川中流域の鉄文化にふれてもらうことを目的として関連団体が連携することが必要となる。また、単に鉄文化にふれてもらうだけでなく、来訪者に感動、癒し、満足感が得られ、リピーターになってもらうことを念頭に、各々の団体が連携して人が集まる仕掛けを作っていく。	①地元(吉田町)がたたら製鉄の歴史遺産とどう関わっていくかが重要。そのための地元を中心とした連絡協議会の結成。 ②来訪者のニーズの把握 ③PR方法、開催イベントの研究・企画	①まちづくり団体を対象とした「たたら製鉄」「鉄の文化」等の学習会開催。 ②地元が中心となった連絡協議会の立ち上げ。	商工観光課 たたらと関わる地域活性化組織 商工団体

構成要素	キーワード	対象	ビジョン	ビジョン実現に当たった課題	検討事項	協力組織体制
	総合的ビジョン	菅谷たたらを中心とした菅谷に限定したたたら製鉄関連施設と自然	菅谷たたら山内のある菅谷地区には、炭焼き施設を除いたほぼ全てのたたら製鉄の歴史を伝える施設や鉄穴場跡が現存している。これらの関連施設を結ぶ遊歩道を整備した場合、全体の距離は700～800m前後と推定される。この距離範囲の中に前述したたたら製鉄の工程が実際に見てわかるフィールドミュージアムを展開する。さらに菅谷川の溪流や桂の木の景観など豊かな自然を満喫できる、全国でも稀な「鉄の歴史」フィールドミュージアムとして活用する。	①鉄池や水車をはじめとした、たたら操業時の状況が残っていない、もしくは滅失の危機にある施設をどこまで、どれだけ保全し復元できるかがカギとなる。 ②菅谷たたら山内をフィールドミュージアムとして活用するためには鉄穴場跡と鉄山の整備が欠かすことができない必須条件と捉える。整備のためには、土地所有者及び地元まちづくり組織の協力が必要となる。	①文化庁補助金事業「地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」の導入について積極的に検討。	

『 菅谷たたら山内 フィールドミュージアム計画 整備案 』



■ 集落全体の俯瞰写真  
高殿後背の森林は繁茂が進行し、建物に影響を及ぼす危険のある樹木が多数存在する。



■ 鉄池と集落内の道路  
高殿前の鉄池の一部は道路整備により破壊されている。また道路側面はコンクリートで補修されている等、山内の景観にそぐわない。



■ 鉄穴流し跡(萱野鉄穴場跡)と菅谷川  
鉄穴流しの遺構跡は樹木が繁茂し遺構の破損が進行している。